

鳥語 60

2010

詩 評論 小説



鳥語社

鳥 60 語

2010年6月15日

目 次

詩

淡水魚（ほか八編）

森 甲子 祝 2

蝶（ほか二編）

三 浦 玲 子 14

つなぐ

鈴 木 茂 生 20

機根と「チャン」と「ス」

毛 利 真 佐 樹 22

小説

ええカッコしいの憂鬱

純 永 慎 之 輔 26

亀泣く

岩 田 孝 子 102

エッセイ 小特集

創造／生田幸平 73

忘れられない詩のことば／鈴木茂生 74

最近思うこと／木津奏子 76

断食考／東築史樹 77

私は私である「I am I」／藤原正雄 79

満月の大晦日／岩田孝子 81

流星／森甲子祝 83

格安ツアープラダイス／木下蘭子 85

日を記すこと／三浦玲子 88

「鳥語」とわたし／柚木 章 90

創作のあしあと／純永慎之輔 93

小説

山鳩

左 近 育 子 96

エッセイ

おたまじゃくし

中 尾 哲 也 144

同人・会員住所録* 25

エッセイ小特集

◎創造 生田幸平

「鳥語」が第六十号を迎えましたが、編集、発行には並々ならぬご苦労があったろうに、辛抱強く頑張つてこられたものだと思つて敬服いたします。

近年は同人雑誌に参加される方が少なくなつていて、この同人雑誌も大変苦勞されているようです。いろんな自己表現の場が増えていて、てつと早い手段を活用しているようです。ケイタイ短歌、ケイタイ俳句、ケイタイ小説、あるいはインターネットなど、発表手段の裾野はかなり広いようです。しかし、こと文章となると、それらはやはり舌足らずで、ありきたりな表現で魅力に欠けているのです。文学にとつて最も大切な推敲という作業が軽んじられて、文章の持つ味わいというものよりも筋書きの面白さばかりが強調されているようです。ケイタイ短歌やケイタイ俳句には若者特有の斬新さや鋭利な表現などが時々見られて感

心させられることもあります。小説作品などの長文になると、感覚的な表現だけではとても処理出来ず、結果として、あらずじの範囲に留まつてしまうのかも知れません。そこで満足してしまつていことがいつそう文章を鈍体化させてしまい、その浅い満足感が同人雑誌への参加を鈍らせているのでしょう。自己主張ばかりが先行して、同人誌での台評会などで自作が批評されることを嫌うのでしょうか。

そんな若い人たちにとつて、魅力ある同人雑誌はあるのでしょうか。古い同人が馴れ合いで集まつて作品の発表の場としているだけでは、仮りに新しい参加者があつても場違いな所に自分が来てしまったという孤立感を与えてしまうように思うのです。やはり少々欠点や異質なものがあつても、新鮮な風がよく通う場として、寛容さをもつてその芽を育む役割もあつていいのではないのでしょうか。そのことが、その後につづく世代へバトンタッチ出来る土台と思われるのです。

《上手だけの絵ほど味気ないものはない。》とよく言われます。それは、ただ器用だ！ 腕がいい！ 筆達者だ！

と言うだけで内容に乏しく何も心にうつたえてこないという意味でもあるのです。少々の難点が見えても、明確な主張をもつて訴えていけば、描き切れなくとも、バランスが悪くとも、心に響くものがあり感動を与えられると思うのです。その部分が作品の最も重要な点だと思っています。

粗削りな表現であつても、作者の視点が対象をはつきり捉えて充分咀嚼されていけば、そこに詩情のようなものが自然に生まれて、創造のせいかいをつくり、作者が意図しなかった効果をも読む者に与えてくれるのです。

若い人に限らず、そういう作品に出会うととても得をした気分になります。了

◎忘れられない詩のことば 鈴木茂生

わたしはいまでもポツポツと詩を書いている。

青年期の溢れこぼれるような詩のころは残念なことに、もうどこにも見られないが、いまの日々の生活の中でわたしの感性に引つかかってくるものがあつて、それらのうちでまたまたことばを掴みとつたものだけが、わたしの『詩』という形をとつて姿を見せる。

それらは、どちらかというとき受け身のかたちで現れてく

るもので、わたしの生き方や暮らし方、現状への反応のわたしが必然的にもたらすものだろう。

しかし、『詩』というものは、そのかたちはどうあれ、その『詩』を支える精神は本来、もつと積極的なものでなければならぬと思つてゐる。

ここに紹介する、阪神・淡路大震災をとらえた詩は、そういう意味で、現実に積極的にかかわつてゆこうとする詩人のところが、みごとに『詩』ということばに構築されたものとして、わたしを感動させてくれた。

*

神戸 五十年目の戦争 安水稔和

目のなかを燃えつづける炎。

とどめようもなく広がる炎。

炎炎炎炎炎炎。

また炎さらに炎。

目のまえに広がる焼け跡。

ときどき噴きあがる火柱。

くすぶる。

異臭漂う。

瓦礫に立つダンボール片。

崩れた門柱の張り紙。

倒れた壁のマジックの文字。

みな無事です 連絡先は……。

木片の墓標。

この下にいます。

墓標もなく。

この下にいます。

これが神戸なのか。

これが長田のまちなのかこれが。

これはいつか見たまちではないか。

一度見て見捨てたまちではないか。

(あれからわたしたちは

なにをしてきたのか。

信じたものはなにか。

なにをわたしたちはつくりだそうとして

きたのか。)

一九九五年一月十七日

午前五時四十六分。

私たちのまちを襲った

五十年目の戦争。

壊滅したまち。

眼前のこのまちに

どんなまちの姿を重ねあわせればいいのか。

これから。

神戸のまち長田のまち

生きて愛するわたしたちのまち。

生きて愛するわたしたち

ここを離れず。

焼け残った山茶花のかげにきく

鳥の声。

倒れた軒の下の砕けた植木鉢に聞く

水仙の花群。

裏の避難所から帰ってくる子どもたちの

かんだかい声を

こぼれる笑顔を

現に。

*

(朝日新聞1995年1月27日)

また、明治の昔、日露戦争勝利の戦意高揚のただなかに

あつて、与謝野晶子が「旅順口包圍軍の中にある弟を歎き
て」とする副題で

あゝをとうとよ、君を泣く、

君死にたまふことなかれ、

末に生れし君なれば

親のなさはまさりしも、

親は刃（やいば）をにぎらせて

人を殺せとをしへしや、

人を殺して死ねよとて

二十四までをそだてしや。

……（略）……

君死にたまふことなかれ、

すめらみことは、戦ひに

おほみづからは出でまされ、

かたみに人の血を流し、

獣（けもの）の道に死ねよとは、

死ぬるを人のほまれとは、

大みこゝろの深ければ

もとよりいかで思（おぼ）されむ。

……（略）……

と歌った「君死にたまふこと勿れ」について当時の一流

詩人といわれていた大町桂月らが「乱臣賊子」といった表

現で罵詈雑言の限りをつくして激しい非難を加えたという
が、この詩の中心にある反戦・反天皇に近い強烈な精神に
対して、当時の人々がどのように反応したのだろうか。わ
たしは知りたいと思う。

ただ、本来、詩というものは、ここに挙げた二つの作品
のようなものではないか、という気がしてならないのである。

詩といえ、茨木のり子・石垣りん・新川和江といった
詩人たちの名前がすぐに浮かんでくるし、金子みすゞや谷
川俊太郎などの名前も忘れることができないところである
が、現在、「詩と思想」誌に登録されている日本の詩人た
ちの数は三千五百名あまりで、有名無名を問わずに、日々、
それぞれの詩作に励んでおられるということになる。

しかし、今日の出版文化の影響で、わたしたちが眼にす
ることができるのは、そうした詩人たちが創出した多くの
詩作品のなかの数パーセントにすぎず、見られない多くの
詩作品のなかで、わたしたちがほんとうに欲しているもの
も決して少なくないはずと、わたしは信じている。

最近思うこと 木津奏子

最近キリスト教をテーマにした小説を書いた。

わたしはクリスチャンである。

なぜ神の存在を疑わないのか。

そう問いかける自分がある。わたしは疑わない。受洗して、二、三年教会へ通って、それから十年ほど、教会から離れていた時期があった。その一見神から離れていたように見える、その時でさえ、わたしは神の存在を疑ってはいなかったような気がする。私の方からそむいてはいるけれども、常に神はいらっしゃる。そう思っていたような気がする。

受洗する二年ほど前から、わたしは教会に通っていたが、ちようどその頃に、わたしはあることがあって、ある場所であるものをみた。(その時も場所も物も、鮮明に覚えていたのだが、ここでは言わないでおこうと思う) それを見たときに、わたしは唐突に愛されているのだと悟った。紛れもなく神はいらっしゃって、そうして愛してくださっている。それはむせび泣くほどの喜びだった。涙が出て止まらなくなつて電気にしびれたかのように、体が震えた。神の愛とはわたしにとってそのようなものだった。

もう、わたしのそれまでやってきたこと。私の読んできた本。どの一冊、どの事件、どの出来事も、神のご計画のうちだったのだとおもった。神は何ひとつ、無駄なことばなさない。そうしてわたしは、カトリックの洗礼を受けた。わたしは疑わない。神はいらっしゃる。

それより前、教会に通うようになった直前、大学生だったわたしは、T先生の授業で、西田幾多郎の「場所的論理と宗教的世界観」と言う論文についての手ほどきを受けた。

その授業で先生が言われた、「絶対矛盾的自己同一」と言う言葉が、どうしても頭から離れず、わたしはそのたつた九十分の授業で先生が話されたことを、一ヶ月あまりも考え抜いた。ちようど夏休み前のことで、大学は長い休みに入ろうとしていた。バイト先の電気屋さんと、昼休みの最中に、先生が板書されたノートを、繰り返し見ていた覚えがある。

わたしは普段はあまりしつこくない人間だと思う。あまり考えずに物を言うし、人が何か難しいことを言ってきたりも、まあどうでもええやんか、そんなこと、と思つて流してしまふきらいがある。ただ、その絶対矛盾的自己同一、という言葉は、わたしにとって、とうていまええやんかで流せる類のことではなかった。わたしは西田のその論文は読まなかった。わかつたとして、読めばよかったのだらうけれど、大学の図書館の西田幾多郎全集は、一度行ってみたが、そのときその巻だけなぜか貸し出し中だった。その先生の食い入るようにして聞いた授業の声だけが、わたしの心にこだまっていた。それは宗教的思考の出発点について書かれた論文だったように記憶している。こんな事も、もう長い間忘れていた。

断食考 東築史樹

私はときどき断食をする。

体がどんよりと重くなり過ぎたと感じるとき、胃腸の具合がすつきりしないと思うときに実行する。

初めて断食行したのは、四十歳ぐらいのときだった。経験した同僚の勧めで、信貴山の断食道場に行ったのだ。

そのときは十五日間やった。もともと出来そうだったが、契約がそれだけで、後がつかえていると言われ、仕方なく切り上げた。

断食中は何をしているのかとよく人に尋ねられるが、寝転んでいたり、仲間と将棋をさしたり、散歩に行ったりで、平常の怠惰な生活状態と余り変らない。

往復三十分ぐらいの距離に、有名な信貴山の寺があり、断食十五日目にも、そこに散歩に行っていた。少しふらふらすることをのぞけば別に苦痛ではなかった。

家で断食しているときにも、四日目に親類の子を連れて近くの山に登ったことがある。

標高六百メートルぐらいの山で、流石にスピードは出ず、山路に不案内なその子は岐路ごとに待ちくたたびれる風情であつたが、とにかく登り切った。

頂上で弁当のとき、辛抱できなくて卵焼きの一切を恵んでもらい、その一皮をめくりめくり時間をかけてゆつくり食った。

断食というのは、こんな風にしたことではない。新聞などにハンガーСтрайкиの記事があるが、三日ぐらいで

ドクターストップがかかり、不思議に思う。

察するに、参加者は明日から断食と腹いっぱい食ってから、坐りこむのだろうが、これでは駄目だ。

まず下剤をかけ、腹の中の腐敗物質を全部排出してから断食に入る。そして水を絶対に欠かしてはいけない。日に一升は必ず飲む。

組合活動をしているとき、ハンストの機会があつたが、いつまでもドクターストップがかからずTVにでも出ると格好悪いので参加しなかった。断食中は冬でも風邪をひかないと言われている。

外から何も入ってこないのも、体内細胞はまず老廃物を取りこんでエネルギーに変える。したがって体内の老廃物が消える。体脂肪などもどんどんなくなる。体に戒厳令がひかれ、警察官すなわち白血球が大いに増加する。うつかり入ってきた風邪のウイルスまでエネルギーに変えられるのではないかと思う。

断食中、空腹なのは最初の二、三日で、それを過ぎると概ねなんでもなくなる。

ただ先刻の山の例のように、目の前で飯を食われたりすると、その瞬間、猛烈に食いたくなる。しかし瞬間だけで、食欲はすぐに消える。

参考までに断食の世界記録は二百七十日かそこらである。

◎私は私である (I am I am) 藤原正雄

「私はなぜ私なのか」、この命題に捉えられたのは、二十八歳の春、出勤途中の路上であった。

ふいに足が止まった。「なぜオレはカレではないのか」という想いに囚われたのである。

その頃は、カレと一緒に、テレビコマーシャルの仕事をしてた。カレの優秀さに憧れていた私は、いつもカレとの違いが不思議だった。特に「小林秀雄」への理解力は、同じ著作を読んでも全く及ばなかった。

もちろん、その理解力の違いを不思議がつて居たわけではない。なぜ私は「私」なのか。カレも自分のことは「私」という。私も自分のことを「私」という。

その「私」という想いに、ふと足が止まったのであった。それからは、未解決のまま宿題となった。

ところが、十数年前、ジョン・マクドナルドの『運命の貴族となるために』を読んで、長年の宿題が解けた。

いや、解けたように思えたのであった。

「あなたの体はあなた個人のもですが、あなたが発する『私は』という言葉は宇宙的なものです。宇宙全体には、『一』というただ一つの数しかないのと同じように、この宇宙に、ただ一つの『私』しか存在しません。一以外の数は、その一をいくつか合わせたものか、分割したものにす

ぎません。たとえば、七という数字は一を七つ集めた数なのです。大切なことは『私』とは、この一という数字が現れてきた源だということを理解することです」

「あなたが『外なる心』で仕事をする時、あなたは個人的で限界のあるところから仕事をしています。一方あなたが『内なる心』から仕事をする時、あなたは個人を越えた無限の宇宙の力の助けを呼びまし、受け取っています」と、ジョン・マクドナルドはいうのである。

そして、今年(二〇一〇年二月十三日)に出版された、村上和雄著『愛が遺伝子スイッチON』を読んで、ようやく私は納得した。

村上和雄といえば、世界に誇る日本の遺伝子工学の第一人者である。

私たち人間の現在の年齢は「地球生命三十八億歳」ということになるそうである。受精から誕生までの進化の過程に手抜きはいっさいなく、魚の時代、両生類の時代、爬虫類の時代、原始哺乳類の時代を、三十八週間で恐るべきスピードを確実に経て、ヒトは生物がたどってきた三十八億年もの長い進化の歴史を経験する。

「遺伝子の情報を担っているDNAの塩基配列は、どんな人間も九九・五%は同じで、異なっているのは、残る0・五%だけです。そのわずかり・五%で、まったく違った顔や形、能力になるのですから愉快ではありませんか」そし

て「このことからわかるように、人間は他人と比較して生きるのではなく、自分だけの花を咲かせるために、オンリーワンとして生まれてきた存在なのです」

私は肉体的にカレとは「0・5%」だけ違う私だったのである。

遺伝子は物質の連続性であり、魂は生命の連続性にかかわるという村上和雄先生は「心は脳の働きであると多くの科学者は考えていますが、まだ最終結論は出ていません。心と遺伝子の関係を探るのが私の研究ですが、将来的には魂の働きについても解明していきたいと願っています」

「死んで肉体が減びても魂が存在するとすれば、その魂はまた別の新しい肉体に宿ります。こうして魂は私たちの肉体を通して、連綿と生命をつないでいくのです。また、遺伝子は親から子、子からその子へと肉体を通してDNAをつないでいます。ちなみに、仏典によれば魂には性別はないとされています。しかし、受精したときに男女どちらの染色体を選ぶかは遺伝子の選択能力ではなく、その肉体に宿る魂ではないかと思えてなりません」

魂といえば、小林秀雄の『信仰について』の結びの中の一節に「自己はどんなに沢山の自己でないものから成り立ってゐるか、本当に内的なものを知った人の眼には、どれほど莫大なものが外的なものと映るか、それが恐らく魂といふ言葉の意味だ、と。神は人類から隠れてゐるかどうか

わからない。併し私の魂が私に隠れて存する事を疑ふ事が出来ぬ」とある。

将来的には魂の働きについても解明していきたいという村上和雄先生の研究解明が待たれるが、「魂」も「私」も「一」という数字が現れてきた『源』に違いない。

ジョン・マクドナルドも小林秀雄も同じ事をいつているようだ。恐らく「サムシング・グレート」を提唱する村上和雄先生も同じだと思われる。

それにしても、今度の村上和雄先生の「愛が遺伝しスィッチON」は、再読、三読、座右の書としてかけがいのない本になった。長年の宿題が解けただけではない。アレヤコレヤの知識が一つになって消えたのである。

村上先生の恩師で京都大学総長を二期六年にわたって勤められたという脳神経解剖学の平澤興先生の言葉が掲載されていた。

「七十五、六歳から八十五、六歳までが一番伸びる時だ。九十歳まで生きないと本当の人生はわからない」

というのだ。面白いことに、「私は『私』である」ことが判る気がしたしたのは、七十八歳の今である。

これからが伸びる時らしい。だとしたら、これからの十年間、ボヤッとしてはいられない。

遺伝子のスィッチをONにして、生きたいものである。

◎満月の大晦日 岩田孝子

昨年の大晦日から元日にわたっては、十五夜の月だった。その午後十一時五十分、近くの神社へ参拝しようと炬燵を出た。

大晦日は冷える、との気象協会の託宣どおりに寒気が南下していた。風も出て、家にいるときから、電線の鳴るのが聞こえた。羽毛入りの外套に耳を掩う帽子、手袋に白マスキで、車の影のない舗道に立った。すでにそこから、鳥居が見える。

見上げると、天心に満月がかがやいている。首の痛くなるような真上だ。

晦日、というと闇夜のはずだが、太陽暦ではこういうことが起る。しかも元日の未明には、部分ながら月蝕があるという。除夜から元日の望月の月蝕は、新暦に変わってこのかた初めてらしい。とすれば、本邦始まって以来の珍事だ。旧暦では、晦日の月はありえぬことの譬に使われた。曰く、女郎のまことと玉子の四角、あれば晦日に月が出る。

鳥居のまえには、ざっと三十人ほどの行列ができている。東隣は光徳寺、西隣は「カンテグラランデ」だ。

昔、井上友一郎という小説家がついて、その通俗小説は同姓の靖よりも読まれたらしい。カンテグラランデは現在、インドチャイの店だが、友一郎の生家である。友一郎の弟温

さんが井上家の跡をとり、カンテグラランデはその息子さんが経営していられる。光徳寺は、画家の佐伯佑三の生まれた家で、住職は佑三の兄が継いだ。兄弟の母は年とつてから、「これこれ婆さん」と呼ばれていた、とは当時子供だったひとの話である。神社と、隣接するお寺を行ったり来たりしながら好きなようにはいりこんで遊ぶ子らに手を焼き、しじゅう「これ、これ、」と追うていた。いまの住職は、もう、その曾孫になる。

行列のうしろへつくと、奏楽の音が聞こえた。ずっと録音テープだったのが、一年まえから稽古したのである。神社庁の指導かもしれない。

楽人の住む町を伶人町という。天王寺の、堀越町の北にげんざいその名の町がある。堀越町の向いの堀越神社は、昔はともかく、いまは、こぢんまりしたお社だ。

その玉垣に「榎佐館」と刻まれたのが、岩田佐七の料理屋である。堀越神社の西側、茶臼山に広大な敷地をとり、庭に大榎があつた。敷地が広いだけ、季節に応じて見どころを分けた作庭にしてあつたようだ。中に、藤の花房は、地擦りの藤として名が高かつた。

顧客名簿には、心斎橋筋の宝飾店芝翫香の木下金助、茶屋川口軒の川口某、山口銀行社主などが名がならぶ。が、客は、紳士ばかりではない。

帳面には、大広間に三百人を集めての襲名披露がしるされてある。当時大阪には数人の大親分がいて、この宴は、南の福太郎、すなわち「南福」四代目の披露だった。

昭和中期に、ラジオなどの台本を書くかたわら、自身も番組に出演してファンも多かった某は、この南福の息である。南福四代目は本名を新一郎という。南福、新一郎を知るほどの人はこそつてその人格者たるをいうが、息子はそれにふれるのをよるこばぬふうだった。俠客、という親の商売が気に入らなかつたか。南福の子は、男は医者になり、女は學者に嫁した。新一郎は、大阪の恩人のひとり、木津の勘助の顕彰に骨を折り、大國神社境内にその碑を建てた。

榎佐館の長男は、二代つづいて勘当された放蕩者である。博奕は打たぬが残る二つが目にあつたらしい。勘当された二人は、時をちがえて、新町で吉田屋とならぶ大茶屋の茨木屋をひいきにした。「親子茶屋」なる噂があるが、そんな段ではない。ことわざに、粹が身を食う、という。

茨木屋は、北斎まんが風の、こんな図柄の扇子を撒いた。おおぜいの大工が寄つて普請のさいちゅう。新宅かと思つと、九寸角見当の角材で建てるのは「粹」の文字だ。下帯一つに髷を結つた男が、あるは「米」の字の第三画に取りつき、あるは第四画を立て掛けるのが、いずれも二三人がかりだ。また「卒」の字の第二画にのぼり、手ぬぐいで汗をおさえる者がある。

これも茨木屋にゆかりの品、というのが、籠甲に蕨文様の高時絵の櫛と笄の一組で、何れにも「君花」の名が盛上げてある。

君花が女の名として、岩田のたれかが詠えたのなら岩田の家には無いはずのものだ。当然、君花の手になければならぬ。

昭和十三年発行の大阪花街案内は、北陽・南地をはじめ新町・堀江まで、芸子を網羅する。南は、南検番と新南検番とに分かれていますのは、それだけ人数と出先の茶屋が多いためらしい。君花の名が見当たらないのは、この発行以前に退いたのであろう。

案内には茶屋・料理屋が土地べつに並べてある。榎佐館は茶白山にただ一軒載つている。天王寺の西、逢坂の南にあたる茶白山は、すでに郊外というほどの土地ではなかつたが、中心の喧騒から離れ、芸子舞子末社には遠出の花がつく。家族連れは格別、芸子のはいらぬ座敷はない。検番がないので遠出の扱いだが、そのかわり、どこからでも呼ぶ。客に、庭をめでつつ碁をかこみたい、という男があれば、碁を得手にする妓を招ぶ。相当の打ち手にも互角の妓が、新町にいたらしい。

敗戦後、北陽・南地は比較的に早い時期に復興をとげたが、新町はぐんと遅れた。

ミナミもキタも、焼け跡の仮普請でともかく営業を始め

た。一方新町は旦那衆がみな土地持ちで、譲り受けたという人があらわれても地面は手放さなかった。しかも、相応の格式があるから、戦後の混乱期だからといっておかしな商売もできぬ、……というあたりが、新町の出遅れた理由であろう。

敗戦から五年を経て、岩田の家刀自が死んだ。その通夜に、人力車を五六台もつらねて新町から芸子が来たが、それはまだ、色町としての新町全体の体裁はととのわぬうちだった。貧乏所帯の岩田のうちへそんなものが来て人力車が取巻いたので、見物人がでた。もはや戦後ではない、と大臣が言うまでには、およそ五年がかかる。

花街が賑わいだしたのは、昭和二十七八年になつてからである。

行列にならぶ耳に、筆簾の音は多少不安定に聞こえるが、笙はきちんとしたものである。

まえにいるのは二三人になった。無礼でも帽子着用はお許しを願ひ、手套とマスクをとった。

◎流 星 森 甲子祝

私の一期、澤山の夜の末に、星の小さな喃を置いてみた。星の話などは珍しいことはない。昔から数限りない人々が、ときに星に打たれた想いを経験して、逝つたことで

あろう。そうした人々の中の平凡な一市井人として、私も宇治に近い京都の夜空の思出を、自分のためにメモの如く再現してみたいと思つたまでのことである。

平成二十一年十二月、双子座流星群の話が話題に上つていた。ピークは十三、十四日頃と言われた。十五日の明け方四時頃、小用に立つた私は、防寒具で身をかためた孫の二十八歳とぶつかった。

「どこかへ行くの、今ごろ？」

「流星、双子座の。出たら呼んであげる」

双子座の流星群という星の話より、左様ないでたちでこの時間に星を見ようとする若者に私は興味を惹かれた。孫が迎えにくるのを待たないで、私も上衣を重ねて外へ出た。

マンシヨンの裏は木幡沼に向つて一面に開いている。その開いた空地はマンシヨンから更に張り出した駐車場を、船の甲板の如く沼の水にせり出している。十五日の夜は夜目にも著るく晴天であつた。晴天の夜の視界はその九割が天蓋である。その天蓋一杯に清新の夜気と星の光が澄み透っている。人は思わず俗界を離れる。私には孫の情熱がうなずかれた。

孫の所在はすぐ知れた。私は孫に近づくこと並んで頭をのけぞらして空を仰いだ。夜と言っても晴天は晴天なのである。雲一つない天空である。その澄明が私の視力を返つて定かにしない。私は鈍い探照燈のように視線を宇宙に放つ

のである。放つて、力をこめて目を一点に据えていると、やがて満天の星が眼に應じて映ってくる。その解りようは、レンズを一枚取り替えた如くであり、一度に満天の星空が私の眼の中に収斂されてくるのである。まず北斗七星、その北に北極星、東にオリオン、獅子座とさそり座、素人の私にはそれくらいしか分らない。分からないながら冬の星はいずれもしつかりと象嵌していて、またたかないのが確認できる。粒の明点を黄金律に張って強く引き合っている。

「双子座って、どれ？」

「オリオンの上、上つて言うか北、あそこ」

「わからない」

「担荷みたいのに二筋星が並んで双子なんだ」

「どうして双子座流星群って言うの？」

「双子座の近くに流星群の飛んでくる方向があつて、そこからあちこちに飛び散るから」

私にはオリオンのように双子座ははつきりとした識別がつかない。識別がつかないからどれもこれも星が二つ並んでおれば双子座に見える。二列の星を探して地上の間を歩き廻った。マンションの夜燈の量をさけて、出来るだけ暗い駐車場の南端までいってみると、暗くなるにつれて星は数を増し、びっしりと空を埋めつくしている。星々はその呼び名を失い、座を失つて、全部が壮大な一大星座である。

「流れ星一つ見たよ」

孫が近づいてきて言った。

「あ、流れ星」

「どこ？」

「あそこ」

私の指差す上空はるか一直線の光の條が西から東へ移つてゆく。

「あれは飛行機雲」

「飛行機雲？ 夜でも見えるの？」

「星で明るいうちから夜でも」

「おばちゃんまだ一つも流れ星見てない」

孫はだまつて毛糸の帽子をぬいで私の頭に被せてくれた。飛行機雲はか細い光の條をひきながら、肉眼にもそれとわかるほど夜空を進行してゆく。私はこの人工の侵入物に一種の妬ましいものを覚えた。私はしまいに流星を求めているのか星に魅せられているのか、心を空に吸われて歩きまわるから、車止めにつまずいて二度三度転びそうになる。果ては今にも宙へ浮き上がりそうな気分になる。

その時である。予想もしなかった光の鎌が、光の大鎌がついそこ眼前を左から右へ切つて通つたのである。

「あ、流星、流れ星、大きい」

「あ、ほんとや、大きい」

「見た？」

「尾っぽだけ見た」

二人は雷に打たれたごとく立ちつくした。

とうとう流星を見たのである。見たのでなく、流星が目前を通過していったのである。それもあのように月をけずり落した如く輝いて。真実は私達の頭上に常に巖然黙念と懸っている。見れども見えずなのは私達なのではならぬだろうか。たまたま私はそれを双子座流星に惹かれて瞥見したのではないだろうか。一切の自然現象を疑え、すべては神の似姿と訓す古の哲人の言葉は動かないものとしてあったが、今は私の小さな老魂は、底まで流星の神秘に感動していた。今見た流星を实体と信じたい。信じてそれが現象であろうとそれに殉じたい、私は人間の旅立ちを思わずそれに重ねていた。

私は一抹の満足と、永遠の疑問の声を内にききながら、孫のあとについてマンションへ帰った。

◎ 格安ツアー・パラダイス 木下蘭子

二〇一〇年の年明け早々から二度、格安ツアーで旅をした。冬ごもりどころではない。

初めは国内、九州に四日間、二度目は海外、イタリアへ十日間。ほぼ半月、家を空けたことになる。

最近の不景気が影響してか、新聞紙上にも超格安ツアーの広告が目立つ。信じられないような値段で客を呼んでい

るのだ。

九州へは夫宛に来たハガキ広告に夫が乗った。たったの三万円で九州を旅するものだった。宣伝に乗りやすい我々夫婦、温泉に入りに行こうと申し込んだ。鹿児島や霧島は新婚旅行の地でもある。

まだ松の内の九日に集合場所の新大阪へ行くと、なんとそのツアーは百六十人以上の団体であることが分かった。朝の七時という早朝に出る「のぞみ」は相当な団体割引でツアー客を乗せているのだろうか？ ぞろぞろと車両に乗り込み、ぎつしり座って旅は始まった。

小倉からはバス四台に分乗した。それぞれのバスに添乗員とガイドが付いて、九州観光旅行となった。門司を皮切りに熊本、霧島、鹿児島、指宿、宮崎シーガイア、長崎、柳川、大宰府等々、毎日四百キロ、五百キロ走行するハードスケジュール。何でこんなにバスにばかり乗っているの？ と思うくらいで、要するに旅行社としてはお客をバスに乗せて走っている限り手間がかからないのだ。

若い女性ガイドの飽くなきお喋りにつき合われ、観光地やらトイレ休憩やらと、乗ったり降りたりを繰り返してホテルに着いた。

遅くに到着して、部屋割りや非常口の説明を聞いた後で、団体に頂く食事は半分給食である。ずらりと並んだテーブルにセットされた料理は殆んど冷めたもの。いま流行のお

一人様鍋を携帯燃料で作る。その熱でなんとか温かい食事の態をなす。決まり物の最後は貧弱なデザート。年寄りに量的に充分ではあるけれど、なんとなく怪しい。

楽しみの温泉も人数を考えると入る時間帯が気にかかる。団体旅行では女性の方が多い。おまけに女性は入浴時間が長い。混んでる時は洗い場にも苦心する。若い女性ほどながながと居座り、洗髪に余念がない。

朝食は大概バイキングである。人数が多いだけに、並んで皿を取らなければならない。先ずれば人を制す、というが皆競争である。

こうして四日間、確かにあれこれ観光した。特に鹿児島や指宿は懐かしい。城山への上り道で添乗員と一緒にになったので、

「ここは新婚旅行で来たんですよ。もうすぐ金婚式です」

と言うと、

「まあ、長続きする秘訣はなんですか？」

「そうね、我慢かな」

彼女は先を行く夫のところへ走った。

「ご主人の答えも同じでした」

はっはっは。我慢我慢で年を重ねたね。

新婚旅行とは違って、今回はいつもいつも時間に追われ、バスで運ばれた旅だった。

夫は「まるで難民だね」と言った。

二度目は二人の友人とのイタリアで、海外へは夫と行くことが多く、女三人の旅は我慢しなくてすむ分、解放感溢れるものではあった。こちらのツアーも七十六人の大所帯で、バス二台に分乗し、それぞれに添乗員がついた。我々のバスの添乗員は嬉しいことにまだ若いイケメンのお兄さん。歯切れのいい話し振り、きめ細かい気配りに感心した。この点は「当たり」である。別のバスは中年女性。

十四万円で十日間もイタリアを旅するのだからあれこれ文句は言えない。現地宿泊は七回、南イタリアのマテーラ、アルベロベツロ、ソレント、アマルフィ、最後にローマだった。一日の走行は二百キロから三百キロで九州ほどひどくなかったが、海外旅行での七十六人はやはり多すぎる。食事はどうしても給食になる。優雅さとは程遠い。ワインもビールも、水と余り変わらない値段。友人のゆうさんは「同じ値段なら私はワインを飲むわ」

とご機嫌だった。飲める人はいいいね。

ところが食事時間をかけたくないのかすぐにお皿を引きに来る。ゆっくり食事を楽しむ雰囲気ではない。その上トイレが混雑する。

次へ次へとバスで運ばれて、夜の八時頃ホテルに到着。皆が一斉にバスタブにお湯をはれば、ホテルの給湯の許容範囲をすぐを超えて、後の人はお湯が出ないことになる。

ヨーロッパの人はぬるいシャワーで済ますことが多いので、

温泉気分には対応できていない。

ソレントでは山の上のリゾートホテルだった。我々の部屋は二階のブルのそば。張り出したバルコニーが優雅さを誘う。ナポリ湾の向こうにヴェスビオス山。満天の星に現を抜かしていると、お湯が出ない。おまけにエアコンが効かない。ブルブル震えながらシャワーを浴びた。

また、ホテルがすべて市街からかなり遠い。ローマなど市街地図の外だった。その上、地下鉄最寄り駅から徒歩二十五分。シャトルバスもない。ローマでの丸一日半のフリータイム。駅までの殺風景な道を黙々と歩き、帰路も駅からただ歩いた。

格安ツアーではフリータイムが多くなっている。それに対応しているオブションがかなり割高である。旅行社は格安で誘って、オブションで稼いでいるように思う。

オブションの中にカンツォーネディナーというのがあった。折角のイタリア。オペラを楽しむ余裕はないので、せめてと思つて行つてみることにした。大枚一万円。

食堂のようなレストランに詰め込まれて座った。お客は日本人のツアーばかり。テーブルのワインと水はタダだという。喜んだのは浅はかで、そのワインの不味いこと。酸っぱいだけなのだ。ディナーと言ってもお粗末な定番メニュー。パスタ、メインディッシュ、デザート。

肝心のカンツォーネだが、ま、日本の流しである。ギタ

ーを奏でながら歌う男は背の高い優男。アコーデオン担当のずんぐり男とのペアで、日本の演歌もまじえて、よく知られたカンツォーネを披露した。最後の「アリベデルチ・ローマ」にちよつとほろつときて、サイン入りだというCDを持ち帰つたら、記名もなかった。歌手は誰だったのやら。オブションはこれだけしか取らなかったが、あれこれ取っていると、格安が割高になる。

フリータイムが多いことは、我々には嬉しいことで、自由に歩き回った。なにしろゆうさんはアメリカで大学生活を送った英語ペラペラさん。かく申す私もドイツで三年、生活体験がある。外国が怖くない。ただ、もう一人のむつさんは純和製の姫。どんどん動き回ろうとする二人にブレーキをかける。もつとも姫は出発前にちよつと足指に怪我をした。

医師からなるべくホテルでおとなしくしているように釘をさされていたのだ。

姫は素敵なレストランに入つて美味しいピザを食べている最中に、

「おうどんが食べたい」とのたまう。

雨が降ると一刻も早くホテルへ帰ろうと言う。そして、

「熱い緑茶が欲しいわ」

イタリア、イタリアといちばん行きたがったのは姫だ。

イタリアで何をしたかったのだろう。

夕食が付いていない夜が四回あった。昼食が充分だとむしろこれが助かるのだ。ただ、今回は食事も概して貧弱だったので、夕食も欲しい。イタリアはピッツァアラがたくさんあって持ち帰れるのがいい。あれこれ買って、ワインも買って部屋食を楽しんだ。女三人のお喋り宴会。ツアー客のあの人の人に話題は弾む。酔いが廻つてくるとイタズラがしたくなる。格好の標的はイケメンのお兄さん。ワインオープンナーを貸してくれたお礼にと、ラブレターを認め、日本から持ち込んだ干し梅やらデザートに出たみかんの余り物やらを袋に入れてドアの前にぶら下げておいた。

ローマは地下鉄とバスを使えばどこにだって行ける。スリが多いの引つたくりに気をつけるのと、出かける前にいろいろ言われたが、寒い冬場はスリも休業とみえて怖い目には遭わなかった。もっとも、つわもの老女三人組ではスリの方が逃げて行くか。

今日は帰国の途につく、という昼下がりで、空は快晴だった。スペイン広場は陽気に誘われたのか結構人出があった。階段を上りきり、街を見渡せば、遠くにバチカン大聖堂の円屋根が見えた。陽は燦爛と降り注ぎ、つかの間の「ローマの休日」。階段に座ってしばらくぼおとしていた。

四十年前にここを旅したときは私も若かった。連れていた四歳の娘はもう四十五歳だ。長く生きてきたもののだと思うけれど、ローマは変わらないなあ。

「はやく帰らないと時間に間に合わないよ」

と姫の声。ああ、時間、時間。これはツアー中毒だ。たまには遅れていいよ。集合時間は早めに設定されているはずだ。

「地下鉄に乗ったらすぐよ。一時間あれば大丈夫」

と言うと、

「地下鉄が止まったらどうするの？」

純和製はツアー旅行のスペシャリスト。遅れるのが罪のように考える。座りもせず立ったままで急かせる姫に負けて立ち上がった。

旅は主婦にとって家事から解放されるパラダイスだ。イタリアでは家族からも開放された。解放感に浸れなくてどうする。

二度の旅行で感じるのは、「忙しい旅だった」ということである。これは日本人特有の旅行のやり方ではないかと考える。ゆとりのない暮らしを嫌う西洋人は、こんなツアーに行かないだろう。忙しく観光して得るものは、そこへ行つたという単純な達成感だけだ。

嗚呼、日本の格安ツアーパラダイスよ。

◎ 日を記すこと 二浦玲子

後々、そんなに続くとは思ひもなかった（日記）が、

半世紀も続いている。

書き始めたのは中学校からで、黄ばんだB5版のノートを使用している。

久々にダンボールの中から取り出して見ると、日付と曜日、天候を一行目に、本文は生来の悪筆で、毎日ぎつしり綴られている。

気楽に始めたはずの日記の機会は、学校での、生活記録と呼ぶ、取り組みだった。書くことが嫌いではなかった私に、さしたる抵抗はなかったと思われる。

日記は一週間ごとに提出を要請された。返ってきたノートには、細部にわたる誤字や言葉の訂正、文中のアンダーライン、加えて長文の感想があった。

丁寧に読み込まれたという、安心感はあったが、それでも、思春期、あからさまな生活記録を、例え担任といえども、他者に見せることに戸惑いは隠せなかったろうが、それ以上に、屈折する気持を読んでもらえる、嬉しさの方が優っていたのに違いない。

で、高校、大学、社会人、そして五十年が経ったのだから思えば、どんな事があっても書きつづけなければならなかった訳ではなかったはずが、気がつけば、日記帳を開かずにはいられないほどになっていた。

不思議といえは不思議である。

中学時代はノートで済ませたが、高校に入ると、一年日

記を使用している。自由日記もあったが、この書きたいときだけ書くという曖昧さがイヤで買った記憶はない。

日割の枠いっぱいを書く作業も、早くから自分へ義務づけたという経緯がある。

何故もつと気楽なスタイルをとらなかったかと時折り回想してはみるもの――。

爾来、日記とは、特記事項があってもなくても、書くべきという、七面倒臭い習慣がついてしまったのである。

習慣と言えば格好はいいが、躍りになったただけのことだ。日記に対して柔軟な思考を取るより先に、自分へ課せることを選び、同時に、それに伴う多少の苦痛を選んでしまった。

この方法論は、後年、人生の節目節目で思い悩むことにもなる。

日記とは本来自分にとつて、最も書き易い文章作法ではなかったか。試行錯誤はあったものの、基本的には変らなかった。否、変えようとしなかった。

〈博文館〉か〈高橋書店〉の日記。これも他のものに譲れず、長年の愛用である。

古い日記は、何度かの引越しも難を免れ新居の住人となってきた。

昔日。文学好きの友人と日記論を交わした時、折しも結婚間近で、処分したと聞かされた。折角書いたのに、と反

論すれば、本来捨てるべきもの、とあつさり言つてのけた。

又、別の知人。迷わず処分、と即答された。

残し続けるものではない、は、今でも私の日記観を、ゆるやかに狂わせてはいる。

——謂として、古い日記を後生大事に、声のない残骸を、私は。宿痾以外の何物でもない。

日記が私の劇場だとすれば、満月の夜は黄色い大きな月を片隅に置き、あつ、と思つた新聞記事があれば挟む、展覧会や映画の入場券も。分厚い過去でもある。

今さら日記の功罪など無用にしたい。一ばん自分らしさがでること、集中して書くことそのことに、並べて救われるのである。

「鳥語」がまぶしさの六十号だ。数少ない仲間と文学を論ずることを愉しいものに変えた、その歳月は濃密である。

◎「鳥語」とわたし 柚木章

もの（文芸）を書く人なら誰でもそうなのかも知れないが、新しい言葉を身につけたら、それを自分の裁量で使つてみたくなったり、又若干、向きが異なるが詩歌であろうがエッセイであろうが。なんでもかんでも全部やってみるいわばジャンル荒しに陥ることも初期の段階で顕著ではないだろうか。

わたしの生まれは昭和十年（一九三五）で大東亜戦争と呼んで始まった太平洋戦争に負けたのは昭和二十年（一九四五）始まったのは昭和十六年（一九四一）だった。現在、雑誌にしても単行本にしても出版の多くが東京に集中していて異常だが戦後のある時期、大阪でも京都その他の都市から全国誌的なものが出ていた。記憶が薄らいでいるが英語の通信教育の教材は石川県の金沢文庫から入手していたし、戦後民主主義と日本再建の思惑が重なっていたとみえるが青少年を対象とした雑誌をいくつか眼にしたし、「人生いかに生きるか、生きることは食うことだ」とか人生相談をテーマにしたものや、言論の自由論とからんだ雄弁活動まがいのものもあつたと思う。当時の雑誌類など一冊も残さず生家を更地にした時、建物諸共、解体業者に処分を一任した。生家は物置場だったが貴重なものも処分しているようだが今さらどうしようもなく、記憶を掘り起して書くしかない。

昭和二十七年頃（一九五二）「B」という投稿誌があつた。たしか長野市の信賴社？ から出ていた。これに十五枚の短い小説を送つたら、選考したのは伊藤永之介さん（一九〇三〜五八）という農民作家で、どういう内容で、題名も伊藤さんの批評も覚えていないが佳作ラインに揃われたことと、親父が酒を好み炊いた白米に糍菌を加えた稚拙な自家焙煎のどぶろくづくりを描いたものだったとかすかに覚

えている。酒造禁止の省令の有無も勉強しないで強引に書き挙げたのだったが、どぶろくづくりは法に反する行為であつただろう。親父は隠れて酒造に励んでいたし少年のわたしは佳作で良かった、助かったと思つていた。もし入選して活字なつていたら駐在所にやられると心配していた。

後年、現在はＪＲ大阪駅前の第一ビルか第二ビルだかに様変わりしてしまつてゐる西梅田という地域にビール瓶一本三十円のどぶろく屋さんがあつて昭和三十二年（一九五七）頃まで時々、飲みに行つたがこれは明確な密造酒で電気冷蔵庫が普及しておらず氷で冷やすたぐいの状態だつたから特に夏場は防腐のための猫いらずという薬が入つてゐると聞いたものが今日の「にこり酒」の名で知られるものと比ではなく酔いも浅く美味でもなかつた。

わたしは自分の文芸的（文学的と言わず文芸的の方がびつたりだ）出発は十六歳だつたと思ひ込んでいるが新制の高校三年生の頃「Ｂ」と同じような「ＢＵＮ」という投稿誌があつてそれを本屋で立ち読みして初めて書いた詩作品を送つたらどぶろく小説と同じく全面的に否定されず、今度は三番目の順位で入選して活字になり吃驚したし有頂天にもなり鼻高々にもなつた。昭和二十七年十一月（一九五二）のこと。恥さらしだが全文を引用する。

妥協

アメリカから手紙が来た

十三才になる少年からである
家内中しみじみとその手紙を味わう

五才になる妹がいう

うちの秀ちゃんエーゴ知らんのに

アメリカのおない年の子

よう書いてんじやな」……

妹の云つた事は明瞭だ
でも誰も反駁したりなんかしない。

一等は神奈川県の浅見正夫さん、二等は岡山県の岡崎弘起、三等がわたしだ。

この原稿から柚木章「ゆきあきら」というペンネームを用いるが序でに新ペンネームの由来にも触れておく。新婚の頃、大阪府北河内郡門真町（現門真市）二番に借家していたが、その六軒長屋に博多出身の柚木さんという方がおられたがその名前にいたく惚れ柚木章の筆名である年、ある詩誌に自分の作品力を問うべく試みに投じたら入選した。

選者は鮎川信夫さんと長谷川龍生さん（もう一人あつたが思い起こせない）作品名は「わたしの時代」という大袈裟さだつたが長谷川さんは「養蚕は戦争産業ではない、正確に書け」と批判されたが日本には輸出品がなく絹を売りア

メリ力産の石油で戦争したから網が戦争とつながっていた側面が誤解されたようだった。

筆名の柚は難訓としてゆう・ゆず・柚木はゆき・ゆうき・ゆずき……等があるが最初のゆきを選び章は文章の章をあきらめの読みとした。

さて二転三転したが「BUN」で「妥協」を選んでくださったのは竹内てるよさんという詩人で後年この人に京都で逢ったりこの人執筆本のおあ無情みたいな本を読んだりもした。

ものを書く人との交際は誠に儂いが京都の藤木輝雄は別格で二つか三つ先輩で「大阪料飲新聞」の記者をしたり臼井喜之助さんの月刊「京都」や科学同人に關係があつたり、大変失礼乍ら小西なんとかさんと同人誌を出したり往年の「関西文学」でも知られ、かたや京都市電廃止反対運動をやつたり一時代をもたまと生きたが、昭和四十六年（一九七二）わたしが一〇〇日ほど勉強で東京へ出張していた秋に早世したらしい。四十には届いていなかったと思う。彼の「豆飯」という小説名と京都市上京区一条通新町上ル一松町の地名は生涯忘れられない。

藤木は一松町から松尾大社の方へ宿替えしていたがリアリストではなくロマンチストのわたしは宿替えの理由など聞きもしなかった。彼のお母さんは短歌をよくされ源氏を讀めと叱られたし奥さんは鼈甲製品をあがなう良家の娘さ

んだつたがもう四十年もの昔の話だ。

思い出すままに書き連ねてきたが「鳥語」に加入したのは「B」誌に一度だけ小説を出したりしていたものの、もっと細部に亘つて小説を学びたかったからである。ひところわたしは「鳥語」を献本されていたが発行人に郵送料を送つてもあの人は客嚮家ではないから受けとつて呉れないので放つていたが、ある日、チャンスがやってきた。会計担当者が川浪春香さんから三浦玲子さんに変つた。すぐに三浦さんに五千元、郵送代として送つた。あとで聞くと三浦さんは発行人と相談されらしいが会員月一〇〇円の会費として貰つておけとなり、五千元は五十か月分の会費に化けた。去年だつたか一昨年だつたか忘れたがわたしも老年になつていていのちが何年もつか判らないが三年はもつと想定し、三千元送つたが「鳥語」というユニークな同人誌との交際も通算すると八十か月になりそうで合評会へはずつと出席しているので中尾さんと藤原さんとの激論もおもしろいがお逢いしたことのない執筆者も二、三おられるのは寂しい。

一生懸命に読んでいつて、執筆者から教えて欲しいことがあつても教われないのは苦痛でもある。愚痴が多くなるも長生きできないそうなので、これくらいところで擱筆しておこう。枚数も少しオーバーした。

◎ 創作のあしあと 純永慎之輔

二年前の夏のことだ。大正から昭和初期に数々の私小説を発表した志賀直哉（一八八三～一九七二）の事蹟を調べることが生じ、彼の歩いた場所を訪ねたり関連する書を読んだりした。志賀は代表作の「暗夜行路」をまとめる最後の段階になって京の山科から奈良・上高畑（現奈良市高畑町）に移り住み、昭和十二年（一九三七年）にこの地で脱稿したことはよく知られている。暗夜行路を読み進めると、後篇の重要な部分に「大和小泉」の地名が出てきて、私は物語のくだりを何度も読み返したりした。そして驚きながら不思議な気分になった。

物語では主人公の時任謙作が斑鳩の法隆寺に行く途中で「片桐石州屋敷」を訪れる。祖父と母の子という出生の秘密に思い悩む謙作は、妻の直子といとこが犯した過ちを知って愕然とする。心底で妻を許しているが逆に直子につらく当たり、自暴自棄に押し流されそうになりながら大和小泉にやってくるのだ。謙作は「古社寺、古美術行脚を思い立った」と旧跡を歩きまわるのだが、平成のこんにちJR大和路線（関西線）の大和小泉駅前は全国各地の大都市近郊であればどこでも見られる景色が広がっている。平城遷都千三百年の古都奈良といえども謙作が訪ねたころの風情を感じることが難しい。

志賀は物語に自分の行動を反映させることが多いから、謙作の歩いた道は志賀が実際に訪ねたコースと見ていい。暗夜行路の脱稿前夜、長年温めていた「東洋美術図録」の制作のため奈良に移り住んだ。「古社寺、古美術行脚」は図録素材の取材・収集が目的だった、ともいわれる。もともと志賀は近代美術に造詣が深く、武者小路実篤や有島武郎らと明治四十三年四月に創刊した同人雑誌の「白樺」（大正十二年八月終刊、全百六十号）には美術作品も毎号紹介し、美術評論や作家論も頻繁に掲載していた。

志賀が小泉で訪ねたであろう屋敷の主の片桐石州（貞昌、一六〇五～七三）は大和小泉藩一万三千石を治めた大名だが、茶道石州流の祖として知られた。茶は千利休の長男千道安の流派を学び、豊臣秀吉の側近だった片桐旦元の甥という拔群の家柄から徳川光圀（水戸黄門）や保科正之（会津藩祖）ら大名の門弟が多かった。晩年には徳川將軍家の茶道指南役となり自らの流派を不動にした。

志賀が見聞した石州邸に足を運ぶ機会を得られず書物だけで調べていたとき、この屋敷がどこにあるのか終日悩んだ覚えがある。藩庁のある小泉城は室町後期にこの地を治めていた小泉氏が築城し、その後秀長（秀吉の異父弟）の家臣が入るにあたり城や小泉氏の館を払って陣屋とした。大坂の陣後に入城した片桐貞隆（石州の父）も陣屋を大改修した記録があるから、城郭内に建物が残っているのだろ

うと予測したまではよかった。しかし藩主一族は明治維新で東京に移り、城は廃城令で取り壊された。城跡はしばらく荒地地だったらしい。

話は変わるが、私は昭和三十年代に編まれた「美の脇役」(淡交新社)という古本が好きで手元に置いてよく眺めている。仕事で東京転勤を命じられ、武蔵野の隅に居を構えてからなおさらその傾向が強くなった。初版は昭和三十六年七月。写真と文は大阪本社発行の産経新聞文化欄に昭和三十三年十一月から連載された。あとがきでは「古美術に關する他に類をみぬ新企画をと想いをねり、目立たぬ存在ながら、捨てがたい興趣、価値をもつものを、精選の上にクロースアップした」とし、畿内に点在する社寺の庭園や像、城の壁や欄間、民家の障子、窓、路地、芸事に使う猿面、人形などを写真と著名な文化人の解説で紹介している。この企画をプロデュースしたのは当時同社文化部にいた福田定一(司馬遼太郎)で、写真を担当したのはのちにフリーとなつて活躍した井上博道カメラマンだった。

私はこの本を長年探したあげく神奈川県古書店でやつと見つけて入手し、愛しい女性に触れるようにして毎日見つめているというわけだ。くだんの調べものをしていたとき、ゆつくりと頁をめくっていると七十二番目の「慈光院庭園」に目がとまった。

(ひょっとしてここではないのか)

瞬時に胸がときめいた。慈光院は小泉城から約六百メートル北にある。石州が父親の菩提を弔うために建立し、境内全体が一つの茶室として造られている。美の脇役によれば「不味室」と呼ばれる茶室と書院は重要文化財、庭園は史跡名勝に指定されているという。二頁見開きの大きな写真は庭園が写され、解説では「土臭い旧家という感じを与えるがよく見るとそこには激しい起伏がひそみ、かりこみの一枝一枝の切り口にさえ不敵な質感があふれている」と記す。今さらながら足を運んでみたい衝動に駆られた。庭園の奥に見える大和盆地や笠置の山並みに昭和三十年代の美しい風景が見られる。文章では「市営住宅の赤屋根が(景色の)一切をぶちこわし、目の下の関西線も昔は一日百二十十三回のカリン・カーが走り出す(園点は筆者)という年々進む寺の周囲の開発を嘆いているが、現在では大阪市や奈良市のベットタウン化し鉄路には数分おきに通勤・通学の電車が通りすぎる。近くに「京奈和道」という高速道路の建設も予定されている。いま改めて読むとなんともものんびりしていてほっと胸をなでおろしてしまう。

それでも暗夜行路には「慈光院」とは記されていない。いくら小説とはいえ志賀の性格から推測すると慈光院に寄ったとしても石州屋敷とは記さないだろう。しかも寺が藩主の居館だった記録はなく、歴代藩主の墓所は京・紫野の

大徳寺にある。あれこれ補充していくと、やつぱりこも違うのではないかと再び頭を抱えてしまった。

結論から言うと城郭内にあった藩主の居館跡に現在「高林庵」という建物があつて、どうやらそれが志賀の訪ねた現場らしい。高林庵は石州流茶道宗家の本部が置かれ財団法人が管理している。敷地には内庭、中庭、裏庭と、大きな庭が展開し、明治期に東京から移築した江戸屋敷の一部が「庵」である。御殿には貴人の上段の間や代々御家に伝わる大きな仏壇があつて現在も片桐家の居宅という。高林庵の存在を知ったときは「今回こそ石州屋敷なのだ」と納得したのだった。

ともあれ自分の知識のなさゆえ調べものに苦労したことは否めない。書物だけで事蹟を追跡する限界も感じた。やつぱり「現場」なのだ。記者時代に美の脇役の演出者だった司馬遼太郎はエッセイのなかで「歴史を調べるときいまでは何もなくともとにかく現場に行く。そこで見聞きした体験が私の体のなかで化学反応を起こすのだ」という趣旨の発言をしている。池波正太郎も時代・歴史小説を構想、執筆するときにはできる限り物語の舞台に足を運んだという。私の活動する身近な地にあつた志賀の足跡。『還暦の巻号』となつた「鳥語」六十号の合評会的时候は、志賀の心境を石州屋敷で感じてみたいと願っている。

東築史樹さん（本名・栗岡宏「鳥語」同人）が急逝されました。

御葬儀は二〇一〇年三月十三日、家族葬として、しめやかに営まれました。

御遺族の御意志のままに「鳥語」から、発行人と、他一名が御葬儀に参列しました。

東築さん、安らかにお休みください。

二〇一〇年三月

鳥語社

山鳩

左近育子

ぼくの嫁さん よろしく頼むよ。

祐介はじつに簡単に、理恵を二人に紹介した。

祐介の父も姉も一瞬きよとした目になり、それから理恵の全身を見下ろした。

転勤先から五年ぶりに実家に戻ってくる祐介を父と姉は大喜びで待ち構えていたのだらう。祐介の横に見知らぬ女がいることに違和感を感じたようだった。用意された帰宅歓迎の夕食の膳は三人分で、理恵のは用意されていなかった。

姉の花代さんは慌てて自分のとお父さんのとを取り合わせて理恵の膳を作ってくれた。

「御免なさいね。祐介何も言つてなかったものだから」

花代さんは困惑げな笑顔で取り繕った。

理恵自身驚いていた。

また転勤の辞令が下りたと祐介が言ったとき、理恵はとうとう別れが来たと思った。

転勤先での遊びごとで、ただ酒場の女を相手にしていただけだと、祐介が自分のことを真剣に考えてくれていたとは思ってもみなかった。五歳年上で離婚暦である酒場女だ。気があつて同棲まがいのことをしていたが、彼がまた異動で何処かに行くときは捨てられるのだと覚悟はしていた。殆んど酒場女はもてあそばれて紙屑みたいに捨てられるものだった。

おれについてこいよ。祐介に言われて戸惑ったが理恵は

嬉しかった。転勤先でまた一人暮らしが不便なら、ついて行つて身のまわりの世語をしてあげてもいいと思つた。

本社に戻ることにしたと言つたが、実家に戻ると聞いていなかったし、妻にすると言わなかった。

祐介は日ごろから言葉数が少なく、言葉に出したときはすべてが決定しているといった感じのひとだつた。

実家に連れてこられ、いきなり嫁だと言われて、理恵のほうがちくりした。もちろん結婚式も婚姻届もした覚えもない。祐介の妻として俄仕立ての膳についたとき、理恵は奇妙な気持ちになつた。これでいいのかしら……。

「いつ結婚したのよ、連絡もせずに。式にも呼んでくれないで……」

花代さんは不満そうに祐介を睨みつけた。

「結婚式——。そんなくだらないことしないさ」

祐介は突き放すように言つた。

「けじめつてものがあるでしょうが、親戚の手前もあるし、それに理恵さんはしてほしいよね、女ですもの」

花代さんは理恵に笑いかけるように言つた。

「こいつならいいんだ。一度はしてるんだからなあ」

祐介はすらすらと言つた。

「一度つてどういうこと」

花代さんの顔が尖つた。

「バツ一、いま流行のさ」

無神経な祐介の言葉に、一瞬その場が凍つた。

理恵は口に入れたものが喉に痞えた。

「まあお前が好きなならそれでいい」

お父さんが重い声で言つた。

しらけた食事が終わり、お父さんは車椅子を花代さんに押させて、寝室に入つて行つた。

お父さんは八年前に交通事故に会い脊髄損傷で立つて歩くことが出来なくなつたのだと祐介が説明してくれた。

花代さんがお父さんの面倒をみているらしい。

ここに来て三ヶ月が過ぎたが、理恵はときどき悲しい気分になつた。

祐介は残業といつて夜は遅いし、日曜日もゴルフだの、野球だのと理由をつけて出て行く。この家に連れて来られて、置いてきぼりをくらつた感があつた。

それに花代さんの視線はいつも針のように鋭くて痛い。

掃除をしていても、台所仕事をしていても、背後から冷たい目が光つていそうに思えた。お母さんが早くに亡くなつて、父親と弟の面倒をみてきた人だから、いきなり他人が入つてきてあれこれするのは面白くないのだろう。なるだけ花代さんにお伺いをたてているが、あなたの好きになさればと冷たい返事が跳ね返ってくる。

五歳も年下の弟には幼顔の可愛いお嫁さんをと心に描い

できた花代さんにとつては、自分と同年齢で離婚暦のある酒場女など、許せないものがあるのだろう。

どうしてこんな所に飛び込んでしまったのだろう。理恵は以前居た酒場の喧騒をふと思いついていた。祐介と酒にまみれて戯れていた頃が懐かしかった。

車椅子のお父さんが居なければ、祐介を捨てて、とつくに酒場に戻つてよ。理恵はきょうも夜の戻りが遅い祐介のベッドを覗み付けた。

お父さんは縁側に車椅子を運んでもらつて、一日中読書に耽つている。

短大で歴史を教えていたというお父さんは、交通事故のため定年まで三年残して勤めを辞めたらしい。難しそうな本を読み、頭が疲れると、目を細めながら庭の木々を眺めていた。古い家なので樹木も多く、何処からかいろいろの小鳥が木の实を食みに来るらしい。

「じつと見ているのもいいもんだよ。季節が変わると、その季節の鳥がちゃんとやつてくるんだ。不思議なくらいちゃんと飛んで来るさ」

お茶を運んだ理恵にお父さんは静かな暖かい声で言う。体の不自由さに苛立つこともなく、まるで何かを遠観したかのような柔和な笑顔が理恵は好きだった。

お父さんは話好きで、理恵を捉まえては講義をしたがる。家事に一区切りついてほつとしてしていると、

「理恵さんちよつと……。ヒマか」

縄文土器の説明から発掘調査に行つて一千年前の壺の欠片を見つけたときの感動をいまのことにように話す。話し出したら三十分が一時間になる。それでも理恵は嫌でなかった。話の内容はわからないこともあったが、柔和な笑顔でゆつたりとした口調でありながら、体の奥に妙にずしりと響いてくるような声だった。まるで遠くから聞こえてくる説経を聞いているような心の安らぎが理恵にはあつた。花代さんがまた始まったかと横で笑う。

父の介護のため勤めていた会計事務所を辞め、家で經理の仕事している。天気の良い日は車椅子を押して散歩に行き、夕方父を風呂に入れるのが、花代さんの日課だ。

立つことの出来ない大柄のお父さんを抱きかかえて湯船に入れるのは大変な作業のようだった。

「あなたがきてくれて本当に助かるわ」

花代さんが笑顔になる。このひとのおかげでお嫁にもいけないのよ、とお父さんの体をバスタオルで包みながら唄うようにいう。

「はいはい、済まないね。理恵さんもいてくれることだし、いつでも心置きなく嫁に行つてくさいよ」

お父さんも唄うように言う。

花代さんにも以前恋人がいたらしい。プロポーズされたのに、父を独りに出来ないからと断つたそうだ。その人は

もう結婚してしまった、と祐介にきいたことがある。

お父さんは花代さんの苦しみを知らないらしい。花代さんは本当に大変だったと思う。家事をして、経理の仕事をしてお父さんの介護。

理恵が突然飛び込んできたときには冷たい目を向けていた花代さんはいまは優しい。

祐介は毎晩帰りが遅い。深夜の帰宅は当たり前で、帰らない日もある。

「祐介、浮気でもしてるんじゃない」

夫の席が空白の夕ご飯時、花代さんが言った。

「それらしき気配があるのか」

お父さんがむずかしい顔つきで言った。理恵は何も言わなかった。祐介は酒が好きで、毎晩酒場に通わずにはいられない男だった。機械メーカーの営業マンとして、客の接待にかこつけて会社の経費で酒を飲み、酒場の女にちよっかいをかける。祐介の夜の姿を知っている理恵は、家庭を大事にするような男でないことは承知していた。

営業マンの腕は確かのように、そこそこの実績も上げているらしく、給料以外の報奨金で、遊ぶ金も足りているらしい。給料をちあんと入れてくれるだけでいい。

以前別れた男は、仕事は休みがちで競馬やマージャンに凝り、ろくに給料も家に入らなかった。

理恵は居酒屋で働いて家計を助けていた。愚痴を言う手と脚が飛んできた。よく頬に青あざをつくって居酒屋に通っていた理恵に優しい声を掛けてくれたのが祐介だった。頼んで嫁にしてもらったわけでもなく、いきがかりで妻にされてしまった感のある理恵にとつて、祐介がいつか戻ってくる場所に自分がいるというだけで満足だった。

花代さんとお父さんが傍にいてくれるから心が空白にならずに済んでいる。

「少しひどすぎるよね、日曜日だって家に居たためしがないわ、ゴルフだの、野球だのと言ってるけど、何してるかわからないわよ」

花代さんはカリカリした声で言い、目をひからせなさいよとばかりに理恵の肩をポンと叩いた。

「理恵さんは不安な気持ちになつてるのか」

お父さんが理恵の顔を覗き込んだ。理恵は思わず首を横に振った。

「お父さんの前で夫婦喧嘩も出来ないから、理恵さんは我慢してるのよ。お父さんから祐介に何とか言ったら」

「これは、二人の問題じゃ。花代やわしの口出すことではない」

お父さんは眉根を寄せて、濃いお茶を一気に飲み干した。花代さんがこのところ妙に浮き浮きしてる。それによく出かける。恋人でも出来たのだろうか。仕事で出かけるこ

とはあるが、日曜日は大抵家にいるひとだった。このところ日曜ごとに出かける。そのことを言うと、祐介がにんまりと笑った。

「二ヶ月ほど前、酒場でばったり今井さんに会つてさ」

「今井さんで誰よ」

「姉さんの元彼、話したことあるだろ。姉きに振られてほかの人と結婚した人。飲んでたら傍に来て姉のことをきいてきたんだ。まだ家にいると言ったら、うーんとうなつて、俺離婚したんだってさ。姉きにアタックしてみたらとけしかけておいたんだ」

「ふーん、うまく行くといいね」

「お前もそう思うか、あのばあ 早く追い出さなきゃうつとしいからな」

なんてこと言うひとだ。理恵はわが夫の顔を見つめた。このひとが家に居たがらないのは小言を言う姉が煙たいのかもしれないが、わたしはあんたの居ないぶん花代さんで救われているんですがね。理恵は心の中で呟いた。

庭の隅で沈丁花が匂い出した。

小豆色の小さなつばみが日ごとに開いて、緑の葉陰から薄紅色に浮き出るように花開く。甘い香りが微風にのつて縁側に届く。小さな花だが満開になると、むせるような香りが庭いっぱい漂うのだ。

「いよいよ春だね」

本を読んでいたお父さんが、首を上げて目を細めた。目白が梅の木の枝を渡り歩いてひよいと飛び去った。

ここに来てもう二年半が過ぎたのだと、理恵は改めて思った。祐介に連れられてこの家に来たとき、玄関先の金木犀が黄色く匂っていた。秋らしい晴天だった。どうしてこんなことになったのかと思っている間に冬が過ぎ春になった。そしていま二度目の春が来た。いまではすっかりこの家の一員になつてしまっている。それが理恵には不思議に思える。

「花代は嫁に行くつもりになつているのかね」

「かもしれないよ。今井さんが挨拶に来るそうですから」

「そうか、あれが居なくなるとあんたも大変だね。わたしに手が掛かるし、祐介はあだし」

「大丈夫です。がんばりますから」

「よろしく頼むよ」

お父さんは大きく息を吸い、そつと目を閉じた。花代さんが稼げば一番寂しいのはこのひとだと理恵は思った。

昼近くまで寝ていた祐介は、朝とも昼ともつかぬ食事を済ますなり、ちよつと出かけてくると言つた。

「どこへ行く気だ。休みの日くらい家に居たらどうだ。ここへ来て座れ」

小さい子供を叱るような口調で、お父さんが縁側から言

った。

何だよう。

不服そうに、祐介が縁側にどすんと胡坐をかいた。

「ここに座つて庭を見てなさい。いまに山鳩がやつてくる。昼ごろになると必ず来るのだ」

「鳩が それが何だよ」

お父さんは縁側のガラス戸を静かに閉じた。

「いいから黙つて見てろ。人の気配がすると用心してしまふから」

祐介はじれったそうな顔をした。

暫くして、茶色い一羽の山鳩が、庭の端にある物干し竿に止まった。すると何処からかもう一羽の山鳩が舞い降りるように同じ竿竹に止まった。茶色い羽に白い縞模様のある綺麗な鳩だった、二羽はくつくつと喉を鳴らし、首を捻りながら、あたりを見回すようにした。おそらくつがいなのだろう。

羽の美しい一羽が羽ばたきして石灯籠に止まり、それからひよいと椿の枝に飛び移った。それを見定めるようにしてもう一羽も石灯籠から椿の茂みに飛び移った。

二羽は互いに緑の葉を嘴で突きながら枝を渡り歩いた。

小虫を食んでいるのか花の蜜を吸っているのか、動くたびに満開の赤い花びらがひらひらと地面に落ちた。暫く遊んだあとメスらしいのが茂みの奥に身をよじるようにしてす

つぱり入り込んだ。

「ほら、あそこでいつもひと眠りするんだよ」

お父さんは声を潜めてた。

なんと上手に隠れるのだろうか。理恵は感心した。二羽の鳩がいつもやつてくるのは知っていたが、一羽だけが茂みの中で寝るとは知らなかった。

もう一羽は大人の背丈より大きな椿のてつべんでゆらゆらと風に身を任せて揺れていた。

「ほれ、あのこはじつと待つてるだろう。決して先に飛んで行ったりはしない。相手が目覚めるまで待つんだ。」

お父さんは外を指差しながらおもむろにいった。祐介はくだらなそうな顔つきで欠伸をこらえた。

「可愛いじゃないか。あんな小さな生き物でもお互いを労り合つて、仲良く一緒に行動しているのだ。祐介、それに引き換えお前はなんて奴だ。いつも理恵さんを独りぼっちにしておいて、自分のことばかりしか考えてない」

「なんだ説教かよ。はいはいわかりましたよ。三十男が親父に諭され、山鳩でも伝書鳩にでもなりましょうぞ。理恵殿のためにさ」

祐介はおどけるような口調で言い、ついと立ち上がる。ガラス戸を手荒く開け放った。

すると、人の気配に驚いた二羽の山鳩は、羽音を立てて慌ててどこかへ飛び去って行った。(完)